

研究ノート

地域史誌を読む
——地域で普通の人たちが書いてきた
郷土誌の具体像——

高 田 知 和

東京国際大学論叢 人文・社会学研究 第8号 抜刷
2023年（令和5年）3月20日

研究ノート

地域史誌を読む
——地域で普通の人たちが書いてきた
郷土誌の具体像——

高 田 知 和

**Reading *Chiikishi-shi*: Concrete Images of Local History
Written by Ordinary People in the Community**

TAKADA, Tomokazu

Abstract

The purpose of this paper is to clarify the contents of *chiikishi-shi* (local history books) that have been produced in large numbers in local communities. As an example, we will take up four books and introduce their contents by reading them through.

A *chiikishi-shi* is a book of local history written by local residents themselves. *Chiikishi-shi* are not written by specialists like historians. The compilation process may involve enlisting the help of experts in some way, but basically, *chiikishi-shi* are created by local residents who are “amateurs of history”. Although *chiikishi-shi* have been referenced for research purposes in both historical and sociological studies, their contents have not been clarified by reading the entire books. Therefore, the significance of this paper is to clarify these contents by reading individual *chiikishi-shi*.

Specifically, four *chiikishi-shi* published in Okinawa, Hokkaido, and Niigata Prefectures were taken as examples, and their contents were examined.

It was thus clarified that (1) the way in which *chiikishi-shi* were created, and the historical images written therein are diverse, (2) the people who wrote *chiikishi-shi* affirmed the local communities in which they lived, and (3) although some *chiikishi-shi* were compiled from secondary sources, there are some that carefully examine primary historical materials and depict a detailed and dynamic history.

Through an examination of these works, we intend, moving forward, to clarify the historical consciousness of the local community.

Keywords: Chiikishi-shi, Aza-shi, Oaza-shi, Local Community, “amateurs of history”, Historical Consciousness

目 次

- I. 課題の設定
- II. 本稿の視座
- III. 調査, 執筆, 編集の手助け
- IV. 具体的に「地域史誌」を通読する
 - 1. 沖縄県の事例
 - 2. 北海道の事例
 - 3. 新潟県の事例
- V. 事例から見えること

I. 課題の設定

筆者は、これまで地域の歴史は誰によってどのように書かれてきたかということを考えてきた。地域の歴史というと一般には郷土史、地方史、地域史などさまざまな名前で呼ばれてきたものであり、歴史学の専門家（とりわけアカデミズムの）が何らかの地域を調べて書くか、¹⁾ それとも郷土史家と言われる地元の人たちが書いたものが多かった。しかしその一方で、例えば『町内会発足何十周年』とか、新興住宅地の『開発何十周年記念誌』などのようにその地区に住んでいる普通の人たちが書くことも多々あった。そこで筆者は、普通の人たちが書いてきたそうした地域史の本（これを総称して筆者は地域史誌と呼んでいる）に着目して、そこではどのように歴史が書かれているかを調べてきた。

そうした地域史誌は全国的に作られてきているが、地域のことをごく簡単にまとめたパンフレット状の小冊子から、数百ページ、時には千ページ超や上下二巻本にまたがるような分厚いものまであってその内容は千差万別である。例えば拙稿（2016）で取り上げた沖縄県読谷村渡慶次地区では上下二巻のうえに、伝統の組踊を収めたDVDまでついたものに仕上げられている。そのため、一口に地域史誌といっても、一つ一つがまことに違った様相を呈したものとなっており、それがまた各々の地域性を表わしているといっても良い。

このような地域史誌について、筆者はこれまで幾度かまとめてきたが、²⁾ 実は筆者も含めて先行研究では、一冊の地域史誌を通読してその内容を検討したものがほとんどなかった。もちろん、事例に基づいて地域史誌の特徴を論じた業績はあり、³⁾ また、後で示す新井（2012）のように一冊の本を取り上げてその編纂過程を検討したものも例外的にはあったが、多くはそこでの具体的記述を明らかにするというものではなかった。そのため、多くの人たちにとって、地域史誌の存在は知っているが地方の公共図書館で手に取って読む程度のことが多く、細部にわたってそこで具体的に何が書かれているかについては必ずしも共有されてきたとは言いがたい。

そこで本稿では、一つ一つの地域史誌を実際に通読して、章立てや内容に沿って紹介しながら、そこで何が書かれているかを具体的に見ていくことにしたい。そしてこの作業を通じて地域史誌の実体を明らかにし、そこで普通の人たちが歴史をどのように書いてきたかを具体的に検証して

みたい。

但し、全国で書かれてきた地域史誌の量は把握し難いほど膨大であるから、そのなかから選んだほんの幾つかの実例ですべてが分かるものではない。筆者は、この作業を通じて最終的には地域社会に生きる普通の人たちにとっての歴史の意味を明らかにしていきたいと考えているが、本稿はまだそのための準備として捉えたい。そのため本稿は研究論文ではなく、それを書くための準備稿である。したがって、今後の作業のための研究ノート、もしくは資料研究として位置付けて考えていただければ幸いである。

なお、地域史誌はその名称に誌という文字を入れているように単に時間軸に沿った地域の変容を描いた歴史書ではない。当該地域の風俗や習慣、祭礼などいわゆる民俗的な記述も多く書かれたものとなっている。この点については、かつて社会学の佐藤健二氏が「民俗学や人類学や社会学がとらえようとする歴史は、現在の心意や行動のありように、無意識なままに作用している過去の構造である」（佐藤、2011、22頁）と指摘していることを想起したい。以下では、歴史を単に時間軸に沿った変化を描くものとしてだけでなく、佐藤氏の言われるように「無意識なままに作用している過去の構造」としても捉えることで、過去における社会構造や風俗・習慣なども明らかにしていく広い概念として歴史を捉えていく。

Ⅱ. 本稿の視座

まず、本稿で扱っていく地域史誌とは次のような書籍を指している。

「字、大字、区、町内会・自治会、公民館、学校区、旧行政村（昭和の大合併以前の村）などの領域の歴史や民俗について、その地域に暮らしている人たちが主になって公費で編纂した刊行物」（拙稿、2017、124頁改編）。

つまり簡単にいうと、自治体の領域の「歴史や民俗を公費で編纂した刊行物」が自治体史であるように、自治体よりも狭く、いわば日常の生活圏に相当する前記各領域において、その地域の「歴史や民俗を公費で編纂した刊行物」のことであり、一般には「字誌」とか「大字誌」と呼ばれているものである。

地域史誌は、前述のようにもっぱら当該地域に生活している普通の人たちによってつくられてきた。その意味で本稿では、主にアカデミックな研究者である「専門家」に対して彼らを非専門家である「歴史の素人」と考えたい。⁴⁾「歴史の素人」たちがつくってきたせいか、地域史誌は、歴史学からの言及は近年まで限られてきた。例えば永原（2003）でも地域史誌についての言及は皆無であったし（拙稿、2016、96頁）、戸邊（2017）でも、近年の歴史学では「制度の権威を下から支えつつも、そこから不断に逸脱していくアマチュア歴史家の動向が正当な対象となりつつある」（209頁）と指摘するも、そこでいわれている「アマチュア歴史家」に地域史誌の著者たちは含まれていないと思われる。⁵⁾

他方、近年に到って、歴史学でも地域史誌に注目する事例が見られるようになった。

一つは神戸大学地域連携センターで、奥村弘氏が主導している地域連携の成果である。奥村氏らの活動については、同センター発行の『Link』各年に詳しいが、兵庫県内の幾つかの地区と連携して当該地区の郷土史活動を支援するとともに、地域に遺る古文書等の歴史遺産の保存に努めている。⁶⁾

今一つは、東日本大震災を契機にして地域の「記憶」を記録化させておきたいという動きのなかでの活動である。これは国文学史料館の西村慎太郎氏らが中心になって、主に福島県浪江町で

おこなっているものである。これまでに『大字誌 ふるさと請戸』や『両竹』などの成果を出しており、被災地の歴史遺産を保存していくための努力の過程で地域の人たちと協働し、大字レベルの小さな地域史をまとめてきた。⁷⁾

歴史学におけるこうした新しい動向は、菅豊氏らによって紹介された「パブリック・ヒストリー」が歴史学界で広く受容されていることもあり、今日注目されている。⁸⁾ ここでは、「自分たち歴史学の専門家が、地域にどのように貢献できるか」という地点から、地域社会と一緒にになって歴史学の専門家がいかに協働していけるかということが大きなテーマになっているといっ

たがよい。⁹⁾ だが本稿では歴史学との連携作業の結果としてつくられたものではなく、「歴史の素人」である地域住民たちが自らつくってきた地域史誌を対象にするのであるから、その意味で歴史学の近年の動向とは一線を画している。¹⁰⁾

但し、その際歴史学の戸邊秀明氏による次の指摘によって、本稿は大きな示唆を得ている。

「史学史は個々の〈作品〉すなわち歴史叙述そのものを、いよいよ分析対象とせざるをえない。従来の史学史は過去の実証の成果の確認や、方法論・史観の当否を中心に描かれてきた。けれども省察すべき自分たちの日々の仕事の意味は、そのような蒸溜部分だけでわからない。私たちが生産する学術論文から一般書まで、「叙述する」行為が生み出す機能とその効果を検証する、文学研究におけるテキスト分析に比肩できる「読解」が必要なのだ」(戸邊, 2017, 212頁)。

このように、今日においては歴史学でもあたかも文学作品の作家論のように、歴史の「〈作品〉すなわち歴史叙述そのものを……分析対象と」することの必要性が求められている。そこで本稿でも、「歴史の素人」たちはいったいどのような歴史を書いてきたのかを、地域史誌という「〈作品〉すなわち歴史叙述そのもの」の検討を通じて具体的に考えていこうと思う。

Ⅲ. 調査, 執筆, 編集の手助け

ところで、地域史誌の書き手である「歴史の素人」たちにとって大きな悩みは、調査・執筆・編集のノウハウからして分からないという点であろう。そのため、多少なりとも彼らに助力する人や機関が必要となる。全国の諸事例を通して見ると、そこでは以下に挙げる4つほどのパターンが見られるように思われる。

1. 村石(2016)で、長野県の北信地方(特に中野市や須坂市)について書かれているように、「何らかの形でこれまで多少歴史学に関わっていた人が編纂に関係している」場合である。¹¹⁾ つまり郷土史家、あるいは郷土史の会で研鑽を積んできた人が編纂に関わっているケースで、特に同地方では、一人の郷土史家が複数の地域史誌の監修を務めているケースも見られる。

2. 自治体史編纂関係者が助言する場合。沖縄県の読谷村や名護市のように、自治体史の編纂を長年続けるとともに「字誌」発刊の支援をしているところで見られる。¹²⁾

3. 業者へ依頼する場合。これは、意外に多い。ここでいう業者とは、出版社、印刷会社、あるいはフリーライターなどで、編集作業の最初から、あるいは途中から依頼することもあり、どのタイミングで依頼するかは区々である。¹³⁾ 但し、いずれの場合でも、調査や資料収集は地域の人たちがおこなっている。そうした資料を提示して、執筆や編集をお願いするのである。

4. 印刷会社。これが3の事例と異なるのは、印刷工程で編集作業に関わるからである。3では、もっと広義に編纂作業そのものに関わることを念頭に置いている。

地域史誌は、文章を書く習慣のない人がつくることが多いので、このように適切なアドバイス

を必要としている。そのため、前述の神戸大学地域連携センターや西村慎太郎氏らのような専門家との協働作業でなくても、上に見たように何らかの助言者が存在していることも多い。もちろん、『町内会発足何十周年』のようなごく内輪のものやパンフレット状のものでは、そうしたアドバイスは特に受けていないであろうが、他方で多少なりとも本づくりの専門知識を有した人が何らかのかたちで関わるケースがあることも、ここでは確認しておきたい。

Ⅳ. 具体的に「地域史誌」を通読する

これまでの議論を前提にしたうえで、本章では地域史誌を具体的に読んでいきたい。事例として取り上げるのは、沖縄県二つ、北海道一つ、そして新潟県一つである。合計四つというのはあまりにも僅少な数字であるが、やむを得ない。

これらのうち、沖縄県では北中城村和仁屋地区と、沖縄市青那志地区を見る。前者は、ごく最近つくられたばかりなので近年の編纂成果として紹介したい。後者の青那志地区は、実は嘉手納基地に地区全体が収容されてしまっていて現在は地区としては存在していない。したがって、そうしたところでも地域史誌はつくられてきたという意味で、見ておきたい。

次に、全国のなかでも最も多くつくられてきたと思われる北海道では、当別町川下地区を取り上げる。ここは開基百年記念でつくられており、その意味で北海道の典型的な事例と言ってよい。

最後の新潟県の事例は、佐渡の旧金井町大和田地区（現在の佐渡市千種大和田）である。佐渡は地域史誌編纂が盛んなところで、かつ古文書も数多く残されている。したがって大和田ではそうした古文書を「歴史の素人」である地域住民たちが丹念に読み込んで書かれたものとなっている。本章では、彼らが古文書をきちんと読んで執筆している点と、地域史誌ならではの方法論に注意しながら見ていきたい。

なお、地域史誌の一般的な特徴についてはこれまでも拙稿で種々書いているので、ここでは繰り返さない。詳細は、拙稿（2015, 2016, 2017, 2022）を参照されたい。ただ一つ、北海道に関しては、冒頭で簡単に触れたように、「アイヌの集落が自らの歴史を語り始める」という観点から平取町の『二風谷』誌を検討した新井（2012）がある。同論文は同誌編集の中心であった貝澤正の思想と編纂の過程、それと同誌の意義や影響にまで踏み込んで論じた労作である。本稿自体は一般論として地域史誌を取り上げているのでやや視点は異なるが、北海道の地域史誌の特徴としては学ぶ点が多いので、以下でも適宜参照していきたい。

1. 沖縄県の事例

i. 北中城村和仁屋

・和仁屋字誌編集委員会編『和仁屋字誌』和仁屋自治会、2021、520頁

①編纂に至る経緯と構成

本書の奥付に書かれているのは上記の書名であるが、表紙には「健康長寿の郷 字誌 わなむら」と書かれている。「わな」とは「和仁屋」の本来の呼び名である。

同書については、既に拙稿（2021, 2022）でも多少紹介しているので、ここでは簡単に記しておきたい。

本書は、地区内の16名の編集委員によってつくられたものである。過去の出来事をただ記録・保存するだけでなく、和仁屋で今住んでいる住民たちが「地域の歴史や文化を学び、継承し、現在について考え、より良い地域づくり、ムラづくりにあたる際の助けとなるために編まれた本」

であるという（編集委員長「発刊にあたって」）。したがって、戦災などのため文字資料が極端に少ないこともあるが、地区の歴史を時系列で叙述するのではなく、主に聞き取りによって地誌・民俗的な要素も多く掲載している。

和仁屋地区で編集作業が始まったのは2014年度だった。同年の自治会定期総会で自治会長から提案し、全会一致で可決承認された。すぐに「和仁屋字誌編集委員会規程」が作られて委員を委嘱し、第1回字誌編集委員会が同年6月に開かれた。その後編集委員会は、毎月2回定例会議を開き、やがて各部会ごとでも研究討議されて作成された。

目次は、巻頭の諸あいさつや写真などを除くと以下の通りである。

第一章 概要	43
第二章 わな自慢	55
第三章 暮らし	133
第四章 歴史遺産	293
第五章 沖縄戦	327
第六章 移民	467
編集後記	517

この目次を一見して分かることは、第三章「暮らし」と第五章「沖縄戦」の分量が圧倒的に多いことである。前者は、先に見たように「地域の歴史や文化を学び、継承」するため、これまでどんな暮らしをして来たかを諸方面に渡って記録したところである。また後者は、既に戦後70年を経過する時点での編集であるから実際の戦争体験は希薄になっているが、沖縄県ではこれまで聞き取り調査が数多くおこなわれてきたので、『沖縄県史』や『北中城村史』の他、大学生たちによる調査報告書など既刊の書籍からの転載（但し人名などの誤記は修正したうえで）も含めて多くの証言が掲載されている。

なお、本書では随所にコラム欄が設けられているのも特徴である。コラムは実に31もあり、その多くは編集委員が顔写真付きで書いている。例えば第三章第一節「子供の暮らし」には「不発弾で遊ぶ」とか「ミルクの給食が始まる」といった、主に自分自身の体験が記されているものである。

②内容

内容のうち、まず第一章は和仁屋地区の文字通り概要である。同地区は、本土復帰の1972年当時は94戸であったが、2018年時点で318戸にまで増えており、那覇市から比較的近いせいも、この数年でも微増している。

第二章の「わな自慢」というのは、編集委員会で「誰に何を伝えたいのか」を最初に話し合った際に「次世代の和仁屋の子らに和仁屋の誇りを伝えたい」ということが共通の思いだったので、「ほかの地域と比較して良いと思う所や個性的だと感じている所をまとめた」ものである。これは、「ややもすると自慢話になりそうだが、開き直って後輩たちのためという大義名分を得てここに記すことにした」ということで（以上、58頁）、次の七項目が挙げられている。すなわち、和仁屋気質、区民がつくった公民館、エイサー、環境整備、陽豊結志、漆喰シーサー、豊富な水である。

次の第三章「暮らし」は、本書で最も記しておきたかった部分の一つであったろうと思われる。ここでは子どもの暮らし、民間療法・民俗知識、民話と伝説、生業、団体組織、自治会、人の一

生、教育、村芝居、交通、衣食住の十項目について説明されている。

例えば生業では、和仁屋は太平洋、中城湾に面した好漁場であり、地崎沿岸は漁業に恵まれた立地条件を備えているが、サトウキビづくりなどの農業が盛んであったので漁業を専業としている者はいなかった。海は、潮干狩りや海藻類を採るなどの接し方であったという。また戦後になると、人びとは米軍基地内でのいわゆる「軍作業」にも従事するようになる。中学生までの子どもたちもハウスポイとして働くことが多く、「日曜日になると、朝の八時までに鎌を持って米人の住む住宅へ行ってドアをノックし、「ハロー、ハロー」と声をかけて、中から人が出てくると「カットグラス？（草刈する？）」や「ウォッシュカー？（洗車する？）」と聞いて仕事をもらった」などという経験談も記されている（203-204頁）。

第四章「歴史遺産」とは、次のようなものである。すなわち、和仁屋の古い集落地図をもとにして字内の道、川、井戸、御嶽、クムイ（池）などを調べたら、それぞれに名前や意味があり、そこで人びとが自然とどう関わって生きてきたかをひもとくと、何を大事にしてきたかが見えてくる。それを「我がむらの「歴史遺産」」と呼んだものであるという（296頁）。ここではまず道や川について記した後、「行事に生きる歴史遺産」として種々の行事がおこなわれる実施日、行事名、実施主体と場所、お供え物、具体的な内容が一覧表になって9ページにわたった表にしてまとめられている（318-326頁）。

第五章「沖縄戦」では、20名の証言が載せられている。また、次の第六章「移民」によると、和仁屋地区では1903年の最初の人から1941年までの38年間で海外移民は113人にのぼるが、これは北中城村内では最も少ない人数であるという（470頁）。内訳は、男75人、女38人で、移民先はフィリピンが49人と最多、ついでハワイ29人、ブラジル27人となっていて、残りは中南米諸国である。とはいえ、やはり村内の他の地区よりも移民数が少ないためか、近年の沖縄県内の自治体史や他の「字誌」に比すると移民のページ数がやや少ないように思われる。北中城村全体では38年間に実に3,427人の移民があったが、このうち和仁屋地区は3.3%を占めるに過ぎないのである。

以上のように『和仁屋字誌』の内容を見てきたが、気が付くのは名簿類が少ないことである。例えば北海道などでは地区の記録としての要素が非常に強いせいも、自治会長をはじめとする多くの組織・団体の説明と歴代会長名が記されているが、本書では最末尾の1ページに「歴代自治会長」が歴代順で紹介されているだけである（513頁）。

このように、本書では制度的な名簿類よりも、地区内の歴史的経緯を物語る「わな自慢」や「沖縄戦」と、実際の「くらし」の状況が多く綴られてきたということができよう。コラム欄を多用して読み物として意識されている点も含めて、「現在について考え、より良い地域づくり、ムラづくりにあたる際の助けとなるために編まれた本」が目指されていたのである。

ii. 沖縄市青那志

・青那志誌編集委員会編『青那志誌』青那志共栄会、2009、174頁

①編纂に至る経緯と構成

青那志は、旧越来村（現沖縄市）にあった地区である。ただ現在は、すべて嘉手納基地の一部になってしまっているので、1945年以降は住民はいない。したがって本書も刊行主体は地区の自治会ではなく、「青那志共栄会」である。同会の会長によれば、本書の成り立ちは次のように説明されている。

「私達は、先祖代々長い間住み慣れた故郷、青那志を去った悲惨な大戦により、家屋、田畑、その他すべてのものを失いました。戦後、生活環境が大変厳しい中を県民の英知と粘り強い精神力

で幾多の困難を克服し、復興に取り組んで参りました。……（中略）

しかし、昨今の生活様式や教育、文化、その他価値観の多様化等、社会変貌は著しく、戦前の青那志についての記憶等も次第に薄れ、これまでの青那志の美しさや、良さを是非とも後世に残すべく、会員の間から青那志誌編集の要望が数多くありましたので、早速、評議員会におきましていろいろと議論し、検討を重ねて参りました。……」（「ごあいさつ」）

こうして2004年6月に10名の委員からなる編集委員会が組織され、2009年10月に発行された。目次は以下の通りである。

第一章	屋取集落の始まり……………	1
第二章	地理的環境……………	15
第三章	王朝時代の諸制度……………	30
第四章	衣食住（暮らし）……………	35
第五章	生業（産業・職業）……………	39
第六章	年中行事……………	51
第七章	医療……………	68
第八章	娯楽と芸能……………	69
第九章	教育……………	73
第十章	海外移民……………	82
第十一章	土地制度……………	96
第十二章	戦前戦後の思い出……………	108
第十三章	第二次大戦後……………	130
第十四章	各界で活躍した人々……………	143
第十五章	青那志の高齢者の皆さん……………	149
第十六章	青那志共栄会の活動……………	155
第十七章	資料……………	168

目次から分かることは、まず、総ページ数の割りには非常に細かく章立てがなされていることである。それは、一つ一つの項目を網羅的に記述することで、失われた青那志という空間を再現しようとしているかのようでもある。

そうした項目群のなかでページ数が最も多いのは、やはり第十二章「戦前戦後の思い出」で、ここには11名の体験が綴られている。ついで第六章「年中行事」が多いのは、座談会が含まれているからで、第十章「海外移民」でも、1920年生まれでフィリピンに移民した女の人の体験談が書かれているのでやや多くなっている。反対に第七章の「医療」は、青那志には病院などの診療機関がなかったこともあり、いわゆる民間療法が列挙されているだけなので短い。また、こうした構成に関連して、青那志地区は空間的にも失われてしまっているもので資料と言えるものが非常に少ないため、沖縄県内の諸他の地域に比べてもより一層聞き取りの手法が用いられていたということも指摘できる。

なお上記の目次には入れられていないが、本書の特筆すべき点は、「昭和20年（1945）3月当時“越来村字青那志住居見取図”が「別添折込」として附属されていることである。これは1945年に米軍が上陸してくる直前の青那志における、文字通り「住居見取図」である。手書きの地図に各家が屋号で書かれており、まさに失われた空間の再現に他ならない。現地のことを何一つ知ら

ない者が見ても十分に想像力をかき立てられるもので、往時を知る年配者が見れば感無量と思われる。「字誌」のような、小さなエリアを対象にした郷土誌ならではのものと言ってよい。

②内容

ところで『青那志誌』の内容であるが、各章を一つ一つ見ていくのは細かくなりすぎていささか煩雑なので、ここではまとめて見ていくことにしよう。

第一章の表題にもあるように、青那志は屋取集落であった。屋取というのは琉球王国独自のもので、「サムレー（士）が首里王府の職にあふれ、サムレーでありながら農業をしていた人達の集落のことである。」こうした地区は武士としての気位もあれば、また「呼び出しがあれば首里に帰れるように日頃の生活も」厳格であったとはいえ、「実際には本村の人達が耕さないようなヤセ地に移住してきているので、田んぼは無いし、やせた畑のみであったので」生活は厳しかった（以上、1頁）。青那志に祖先たちが首里から下ってきたのは、18世紀末から19世紀前半のことであろうといわれている（10頁）。行政字として青那志が成立したのは1940、41年頃のことであるが、1954年の戸籍整備法で行政字としては再び消滅した（13頁）。

青那志は、純農村であったので家屋敷は一般に広がったという（38頁）。甘蔗（さとうきび）、甘藷（いも）、豆類、キウム（タビオカ）、パパイヤその他の野菜が作られていた（39-45頁）。また、屋取集落で「士（サムレー）の子孫であるとのくらいの高さから、遊びの心も余裕も無く、まことに無味乾燥な集落であった」ともされている（69頁）。

教育は、1882年に越来小学校が、ついで1904年に分教場がつくられ、それが1913年に宇久田尋常小学校として分立された（75-76頁）。青那志の人たちは皆この小学校に通ったので、現在は嘉手納基地内にある「宇久田尋常小学校敷地跡」という石碑の写真とともに、同校については感慨深く綴られている。

この後、海外移民、戦前・戦後の思い出などで体験談が多く掲載されている。なかには、1930年生まれの人が「この様な話は家族、弟達にも話したことはなかった。はじめて明らかにした」という、青那志にとっても自分自身にとっても貴重な記録もある（117頁）。ここでは、そうした思い出類のなかから戦後生まれの人の投稿の一つ見てみたい。それは、青那志という地区を考える際に何らかの意義を有していると思われるからである。

この人は1949年生まれなので「もちろん昔の青那志は直接には知りません」。そして自分にとっての青那志というと、「おじーおばーと敬老会と一緒にについて行き、皆さまと楽しい時間を過ごしながら、幸せそうな顔をしているおじーおばーの思い出です」という。そして今回、この原稿を書くにあたって「あらためて青那志とは私にとって何だろうと考えてみたのですが、実際に住んでみたことも無く、昔聞いた話を思い出そうとしても、すっかり忘れていた始末でした。しかし、そんな私にも、ひとつだけありました。それは、代々受け継がれて残るものであり、私も実際に受け継いでいるもの、それは私の本籍地」だという。「この本籍地が私にとっての青那志を意識させ、おじーおばーとの思い出を思い出させてくれるものです」と書かれている（以上、126頁）。

『青那志誌』は2009年刊行なので、1949年生まれは当時60歳である。しかし、60歳の人にして既に実際の青那志を知らないという。この人は本稿執筆時点（2022）では73歳になっている計算なので、その孫世代がもう大学を卒業しても不思議ではない。ということは、実際の青那志を知らなくなっただけから既に三世代が経過していることになる。三世代後の人たち、それも直接的にも間接的にも青那志を知らない人たちにとって、現実の青那志はそれだけ遙かに遠い存在になっているということである。

今後、仮に嘉手納基地から米軍が撤退し、軍用地がすべて返還されたとしても、そもそも景観が根本的に変えさせられていて、かつての青那志を髣髴とさせるものは一つも残されていない。そのことも考えてみると、2009年という時点がかつての青那志を知っている人たちがまだ健在だった時に本書が編纂されたことの意義は非常に大きかった。聞き取りの記憶が、読む人にとりわけ強く印象付けられるのも、そうしたことが大きな理由と考えることができるであろう。

2. 北海道の事例

○当別町川下

・『川郷』編集委員会編『川下開基百年記念誌「川郷」』川下開基百年記念協賛会、1982、533頁

①編纂に至る経緯と構成

本書は、表題にもあるように開基百年記念事業の一環としてつくられたものであり、その意味で北海道に典型的な地域史誌といってよい。川下地区の百年記念事業は、川下神社の改築、開拓記念碑の建設、記念式典、それとこの記念誌編纂等々が企画されて、文字通り地域の総力を挙げた事業だった。

記念誌の編集作業は、同書の「川下開基百年記念協賛会役員名簿」によると、編集委員長、副委員長、書記、会計各1名の他に編集委員17名でつくられた(508-509頁)。具体的には、後掲の目次ごとに数人ずつの班をつくって分担しておこなわれている。1984年4月に第1回編集委員会が開かれて、1987年6月に出された。

この刊行年月は奥付によるが、実際に百年記念式典がおこなわれたのは前年の1986年9月だったから、刊行がやや遅れてしまった。「編集後記」ではその理由として、「全精力を傾け努力を致しましたが、文筆に疎い素人の集まりはいかんともし難く、……一同が農作業の合間の編集会議、年中を通しての資料収集、自宅での原稿執筆、昭和六一年一二月から六二年三月までは殆ど連日編集作業に専念致しましたが」と書かれており、馴れない文章書きと農繁期の多忙さで作業がなかなか進まなかったということであろう。「連日編集作業に専念」したのが「昭和六一年一二月から六二年三月まで」という点が、農閑期に一気に作業を進めるしかなかったということをよく物語っている(532-533頁)。

目次は、以下の通りである。

第一章 開拓のあゆみ	1
第二章 行政	25
第三章 産業	63
第四章 古老に聞く(座談会)	219
第五章 教育	239
第六章 社会・文化	267
第七章 地域の現況	305
第八章 開基百年記念事業の記録	491
年表	510
編集後記	532

目次からまず読み取れるのは、第三章「産業」と第七章「地域の現況」の分量が圧倒的に多いことである。前者は150頁以上、後者は190頁近くが費やされている。

このうち、第三章「産業」は、農林業/農林業団体/農業関係機関・団体/生産団体/土地改良事業の五節からなっているが、その半分以上は第一節「農林業」である。ここは入植して以降の開拓作業が文字通り記されたところで、本書の最大眼目の一つといってよい。また第七章「地域の現況」であるが、このタイトルだと分かりにくいのが、要は「我が家の家族史」である。これは各世帯ごとに書かれた「家族史」であり、北海道の地域史誌にはごく当たり前に掲載されている。本書の場合は、世帯主の名前で渡道以来の家の経歴が書かれており、それに家族写真と家系図が添えられている。北海道に入植してきた人たちは、百年史がつくられる時点でも渡道からはいたい三代か四代目なので、こうした「家族史」がほとんどの家で可能なのである。

ちなみに第七章は「我が家の家族史」「その他の団体」の二節構成で、そのうち「我が家の家族史」だけで約150頁が使われている。そう考えると、総ページの三割近くが「我が家の家族史」ということとなり、「農林業」と並ぶ最大眼目の一つといえる。この点は、『二風谷』を分析した新井(2012)でも、同誌で「最もボリュームがあるのは第四章の産業史である」(229頁)、「当書の性格をよく物語るのは第一章の「わが家の歴史」であろう」(232頁)とされており、北海道の地域史誌では共通に見られるものと言ってよいであろう。

なお、本書が編まれていた1985年時点で、川下地区は当別川を挟んで右岸と左岸の地区に分かれていて、それぞれ68戸と77戸、合計145戸から成っていた。このうち「家族史」が掲載されているのは右岸67戸、左岸65戸の合計132戸となっている。つまり13戸は掲載されていないことになる。本稿ではその詳細を論じることができないが、前掲新井論文によれば、『二風谷』でも全138戸のうち14戸の掲載拒否世帯があったとされている。そこでは「アイヌの血を引く家庭よりも、割合としては和人の家庭が多い」ということで、「いろんな考えの人がいるから」という地元の人々の説明を載せている(新井、230頁)。「川郷」の場合も、同じように「いろんな考えの人がいるから」掲載を断わってきたということではないだろうか。

②内容

では、内容の検討に移ろう。

川下地区のある当別町域は、明治維新後に仙台藩主一門家の旧岩出山1万4千石、伊達邦直が1871年に家臣団とともに入ったところである。

第一章「開拓のあゆみ」によると、1887年に伊達家臣の一人だった諏訪辺庄次の長男文助が当別川流域の左岸の土地貸付けを出願し、開墾に従事したのが始まりだという。当時、この地域には名前が特になく、「川縁の高台には先住民の跡であったろうか、まだ堅穴を掘り、その上に茅などを使って屋根を葺いた、5人くらいが住める住居跡があったという」ことである(7頁)。諏訪辺家は1891年にこの土地を離れたが、開基百年記念式典には子孫が招待されて記念碑の除幕に立ち会い、また「開拓先駆者」として顕彰状が贈呈された。

川下地区は、当別川沿いの川縁に近いところは土壤地帯で肥沃であったが、その他の大部分は泥炭質低湿地帯で耕作には不適で、しかも当別川の水害を毎年受ける場所であった。そのため、第一章ではそうした地区が開拓されていく苦闘の歴史が書かれている。ただ第三章「産業」でも書かれているように、大正後期には土功組合の還元水を利用してポンプで揚水する事業が始められ、はじめて水田が開かれるようになった(14頁)。

なお、本地区では1893年に、後に衆議院議員にもなった京都府の西田作次郎が109町歩からなる西田農場を設け、小作方式で開拓に着手している。その際、支配人として親戚筋の藤木安太郎という人物が渡道して自らも開墾に従事した。藤木の子孫はそのまま同地に居つき、この記念誌

の編集委員にも名前が挙がっている。その後、1919年には西田農場は当時あった123町歩を解放して自作農創設を断行した(9頁)。

また第二次世界大戦後には極度の食糧難から緊急開拓計画が立てられ、戦後開拓として入植者が多数入ってきた。20-21頁に挙げられている名前を数えると、実に百戸近くが入植している。だが、「入植者たちが入った未知の地は、土地とは名ばかりの未開地で放置されたままの泥炭原野であったため農地造成には基本的な土地改良工事から着手せざるを得ない状況だった」(21頁)ので、転出していく人も極めて多かった。

やがて1960年代に世界銀行資金導入による篠津地域開発事業によって泥炭地を造田する工事がおこなわれた結果、「念願の本格的造田化し、ようやく営農基盤が整った」ということである(22頁)。

第二章「行政」は、文字通り行政制度の変遷が書かれている。これによると、1947年に、当別町の指導で、「当別川を境にして川下右岸と川下左岸の2部落会と」なり、以後今日に至るまで川下地区は二つの字からなることとなった。本章では、それぞれの歴代会長をはじめとしての歴史がまとめられている。

さてそこで、第三章「産業」である。ここでは川下地区でおこなわれてきた具体的な農林業が書かれている。つまり、稲作、小麦、燕麦、大豆、小豆、大麻、亜麻、とうもろこし、菜種、畜産業等で、その後で農業機械の導入過程がまとめられている。なかでもやはり稲作がどうにかこうにかおこなわれていく過程にページが多く割かれており、その後は前述のように「農林業団体」「農業関係機関・団体」「生産団体」「土地改良事業」がそれぞれまとめられている。

ついで、順序が逆になるが第五章以降を先に見ておくと、第五章「教育」では学校教育や社会教育、第六章「社会・文化」では、神社、保育所、電気、通信、水道、道路、災害、兵事について綴られている。

このように見てくると、衣食住といった日々の生活や民俗的なことについての記述があまりないのだが、それは第四章「古老に聞く」で触れられている。これは男女7人ずつの計14人による座談会であるが、目次で分かるようにページ数がそもそも多くないので、情報量としても必ずしも多くない。

この後で、第七章「地域の現況」と第八章「開基百年記念事業の記録」と続く。前にも述べたように、このうちの第七章は戸毎の家来歴が書かれていて、それがかなり詳細である。その意味で、自治体史の民俗編に見られる衣食住などの出来事は、戸毎の生活史という形で第七章に収められていると考えることができるだろう。

以上から、先に新井(2012)を引用しつつ指摘したように、総じて本書はこの地区の生活の根幹であった農林業が「開基」以来どのように苦闘しながらおこなわれたのかということと、それを表す具体的な戸毎の生活史がメインの書であると言ってよいと思う。

ちなみに、本書は美田が開かれて泥炭地であった頃とは面目を一新したという1987年時点で書かれたものであり、その後現時点(2022年)では既に35年が経過している。これは世代が完全に移行したことを意味し、また農業を始めとして四囲を取り巻く状況が激変した年月でもある。したがって本地区の現況が気になる場所であるが、この点は別稿で改めて考えてみることにしたい。

なお、「開基」の頃に「先住民の跡であったろうか」と触れられていたアイヌの人たちについては、その後どのようなかたちで本地区に関わったかは書かれていないので、その点は分からないことを付け加えておく。

3. 新潟県の事例

○佐渡郡金井町大字千種字大和田（現佐渡市千種大和田）

・「佐渡・大和田誌」編纂委員会編『佐渡 大和田誌』新潟県佐渡郡金井町大字千種字大和田、2001、580頁

①編纂に至る経緯と構成

本書の編纂当時、大和田は85世帯であり、本書はそうした小さな地区でつくられたものである。巻末の「編集を終えて」によれば、編纂の経緯は次の通りである。

大和田では、1985年頃になると地域づくりが大きな問題となっていた。そのため、1988年に「あしたの大和田を創る運動推進協議会」がつけられた。同協議会が全戸アンケートをとったところ、「先祖から営々と築いてきた大和田の歴史や文化・伝統を今書き留めておかないと、人もかわり、資料もなくなりわからなくなるから、まとめてもらいたい」という意見があり、そこで編纂が始められた。

当初、「大和田は小集落であり、台地の開発以来、薬師様を中心にして歩んできたのだから薬師様、そして薬師十二坊の歴史と文化を中心にまとめようということになった」ということで、最初の一、二年は佐渡高校教諭だった児玉信雄氏に古文書の読解指導をしてもらった。そして児玉氏とともに資料を収集し始めると、慶長検地帳を始め膨大な量の古文書類が出てきた。それらを児玉氏の指導のもと、皆で読んで勉強し、執筆も分担し合ってまとめたのが本書である。その児玉氏によれば、大和田の人たちが「手弁当で長年の間根気よく自身に鞭打って取り組まれた」から本書が出来上がったとして、「敬意を惜しみません」としている。

なお、児玉氏は田中圭一氏によれば「佐渡の歴史研究の第一人者」であるが、その児玉氏当人は、「田中圭一先生には、困った時の御指導や御相談」に乗ってもらったと書いている。田中氏はやはり元佐渡高校教諭で、後に筑波大学教授となり、本書刊行当時は文学博士という肩書の近世佐渡史の専門家である。また、編纂委員たち自身は、「児玉先生からは古文書の読解をはじめ、文体の統一、校正、編集まで、すべて先生に頼ってしまい」とあるので、いずれにしても、この両氏の指導が大きかったことは間違いない。

目次は、次の通りである。

序章	わがふる里大和田……………	1
第一章	お薬師さんと大和田の里……………	7
第二章	古代・中世の大和田……………	75
第三章	江戸初期の大和田……………	115
第四章	江戸中期の大和田……………	165
第五章	村の組織と村の自治……………	225
第六章	江戸後期の大和田……………	247
第七章	明治・大正の大和田……………	267
第八章	昭和戦前時代の大和田……………	337
第九章	昭和戦後の大和田……………	391
第十章	大和田の教育・文化・芸能……………	471
第十一章	村の信仰……………	503
第十二章	人物伝……………	533
	佐渡大和田誌関係年表……………	546

資料	555
編集を終えて	577

目次からいえることは、まず、第一章で「大和田薬師とそれを取り巻く薬師十二坊の歴史」を取り上げている点である。これについては、「大和田集落の住民の精神生活の中で、大和田薬師を見落とすことができません」と児玉氏が書いているように、特別の思いがあるので冒頭の章で取り上げられているのである。

他にはこれといった特徴を挙げることはできないが、しいて言えば、江戸時代と昭和期の記述が長い。特に江戸時代については四つの章にまたがり、150頁以上を使っている。また昭和期も、戦前と戦後を合わせると130頁以上である。

なお、これは本当は次項の内容の点で触れるべきことであるが、ここで述べておきたい。それは、本書は地域のなかで見つけられた史料を徹底的に使った記述となっており、それ以外については記述をいわば自重している。というのは、本書では史料を通じていえることのみを書いているのであって、それ以外は頑なに書くことを自ら抑制している印象を受けるからである。つまりそれだけ徹底して「地区の歴史」を描こうとしており、書かれているのは日本全体の、あるいは新潟県とか佐渡全域の歴史でもない。例えば1945年8月15日のことを記述するにしても、そこでは確かに原爆投下やソ連参戦、玉音放送とその後の皇居前広場で人びとがひれ伏し泣き崩れたということが書かれているが、それは4行に過ぎない。いわば前提となる解説であり、その後は3頁半にわたって、地区の人びとそれぞれの8月15日体験が書き綴られている。

このように、全体史の記述を徹底して自重し、地域に残る古文書を通じてひたすら大和田地区の歴史経験を書いていたのが本書であると言ってよい。そこで次に、本書の内容について見ていくことにしよう。

②内容

序章は3ページほどの大和田地区の紹介で、第一章は前述のように「大和田薬師とそれを取り巻く薬師十二坊の歴史」が詳細に調べられている。

そして第二章から九章が具体的な歴史で、いわゆる通史である。

まず第二章では古代・中世が扱われているが、特に重要なのは第三節「千種沖からあがった人びと」であろう。というのは、大和田の人びとは一六世紀末の文禄年間に佐渡全域が大水害に見舞われたために低地から台地上に上がってきたからである。

第三章から六章までは近世で、このうち第三章「江戸初期の大和田」は、慶長検地帳、元和三年(1617)の屋敷検地帳、寛永二年(1625)の新田検地帳、そして慶安年間(1648-52)の名寄帳と「石直し帳」を使って近世初期の大和田の状況を詳述している。特に慶長検地帳は、佐渡全村260ヶ村中で23ヶ村にしか残っていないということで、貴重である(119頁)。ついで台地上に上がった人びとが暮らしていくための開発、水利、治水が書かれている。

第四章「江戸中期の大和田」では、第一節で商品経済の浸透や年貢未払いなどで階層分裂が生じて小作化していく農民が増え、なかでも「資金力の豊富な借金しやすい相川・河原田などの有力町人に質入れる場合が多かった」ことなどが指摘されている(186頁)。ついで第二節では宝暦年間の年貢皆済状や新田検地帳、郷蔵のこと、第三節は享保の改革の影響、¹⁴⁾定免制の採用、殖産興業の勧めや新田開発が書かれており、第四節では寛延一揆と明和一揆についてである。特にこの寛延一揆と明和一揆は佐渡史の中では大きな位置を占めるのでその経緯が書かれているが、

大和田地区では直接の関わりを示す史料は残っていないらしく、大和田に関しては一揆の惣代衆のなかに見られる大和田村の名主の名前が取り上げられるにとどまっている。

第五章「村の組織と村の自治」では、史料に則して大和田の名主一覧や村寄合、村掟、五人組が説明され、第六章「江戸後期の大和田」は、天保の改革とそれの大和田への影響を中心に説かれた後、「飢饉対策」と題された第二節で近世期の飢饉対策が書かれている。ここで注意したいのは、幕末の情勢についてはまったく書かれていない点である。具体的には「村の中では長百姓と平百姓（小前）の対立がおこり、村方騒動が目立つようになった」（266頁）という一文で本節は終わり、次ページはすぐ近代になる。これは、幕末期の史料が直接的にも間接的にも大和田には無かったからだと思われる。そのため、近世期の飢饉対策の記述のすぐ後で、近代へと時代が移行していくことになったのであろう。

さてその近代は、第七章「明治・大正の大和田」である。ここでは、第一節で一般的な諸改革について書かれた後、大和田の明治初年の集落屋敷図が示され、ついで地租改正がやや詳しい。さらに、戸長制度などの地方制度改革、自由民権運動、徴兵制度が書かれている。そして、第二節の記述が分厚い。とりわけ、「農業改良運動の先駆者」について詳述されており、また明治末期に始められた千種沖耕地整理組合も興味深い。またその後、新保川で始められた「かいか堰」と、一ノ堰である藤五郎堰に強い水利権を持っている大和田の関係が説かれているが、この点については後述する。その後の第三節は入会山の分割や共有林について、第四節は大和田蓑、大和田縞などの諸産業である。

第八章の「昭和戦前時代の大和田」では、第一節で昭和初期の出来事について書かれるなかで、衣食住や冠婚葬祭の変遷などの民俗的記述も入っている。第二節では、戦時体制下の食糧増産などについて、個々の戦時体験が書かれている。特に勤労働員と学徒動員の経験が詳しく書かれており、女子挺身隊員は名前、屋号と何年から何年までどこへ行っていったかの表もつくられている。

第九章「昭和戦後の大和田」では、第一節で近郷の山につくられた「米軍基地平キャンプ場」について触れられ、第二節では農業技術の変化に加えて水利の変化が詳しく書かれているが、この点も改めて取り上げたい。第三節は水道や道路整備、第四節では大和田山口地区の構造改善事業、そして第五節はごく近年の話題で、婦人会や青年会などの他、1987年につくられた「大和田壮年会」と翌年の「あしたの大和田を創る運動協議会」に触れ、今後の大和田を考えていく活動が成されていることが書かれている。前述のように、本書もこの活動のなかで編纂が求められたものであった。

時系列に沿った通史はここまでで、この後第十章「大和田の教育・文化・芸能」では、第一節「大和田の教育」、第二節「体育活動」、第三節「芸能」で、特に第三節では能と陶芸が取り上げられている。第十一章「村の信仰」は、第一節「寺院・神社」、第二節「堂・地神」、第三節「石造物と屋敷神」から成り、第十二章は「人物伝」である。この他「資料」として、慶長五年大和田村検地帳、日露戦争以後の従軍者名簿、共同墓地の構成、大和田集落内各世帯の概況、家紋、歴代部落長が載せられている。

③いわば、「水利慣行の地域史」として

さて本書のなかで、特に充実していると思われるのが水利慣行についての記述である。これは近世初期から昭和戦後まで万遍なく扱われており、それだけ農業主体の集落として水が大切だったことを意味しているといえるだろう。この間の記述をごく簡単にまとめると、以下のようなになる。

まず、前述のように一六世紀末の文禄年間、打ち続く水害のため大和田の人たちは台地上に移

住してきた。そして、新保川の上流に藤五郎堰と言われる堰を設けて、そこから水を引いた。藤五郎という人物について詳しいことは分からないが、とにかくこの藤五郎堰を使って、大和田住民たちは田を切り拓いていった。

藤五郎堰は一ノ堰とも呼ばれており、つまり新保川水系のなかではいちばん上手にあった。そのため、「新保川水系の諸堰の中でもっともつよい権利をもつ」ものだった。「夏の渇水期になると一ノ堰の水の配分方法は樽の底に穴をあけ、満杯の水がなくなるまで約15分間（一堰という）本流に流し、次の一堰は藤五郎堰へ流す。これを交互に繰り返す。下流には夏渡り堰・大堰・大和田関（下江）以下多数の堰があるが、それら全体の堰が藤五郎堰と同量の用水の分配をうけることをみても、藤五郎堰がいかに大きな水利権をもっていたかを知ることができよう」（140頁）とされている。

そのため、近世にはいわゆる水論がしばしば起こった。なかでも19世紀初頭の文化年間にあった訴訟については史料に基づいて詳しく書かれている。これは、六ヶ村が連名で大和田村と今一つ、貝塚村夏渡り堰の江子を訴えたというものである。原告である村々は、藤五郎堰と夏渡り堰よりも下流にある大堰から分水しているところで、簡単にいうと「大堰より上流にある藤五郎堰と夏渡り堰（殿江）は水が十分にあって困らないのに、大堰掛かりの田地は水不足で流末では枯れ先田地（干枯れ）ができて極度に困っているから、もっと大堰へ水を落としてもらいたいという」ものであった（151-152頁）。この時、相川から地方役人が来て和解勧告をしたので一応の決着を見たが、それは当座の解決に過ぎなかったからさらにまた大和田が訴えられた。そしてこれは文化9（1812）年の水論取替せ証文でこれまた一応の決着がつけられた。

時代が明治に変わった1882年にも、また大堰江子との間で紛擾が起こった。大堰は藤五郎堰よりも下流にあるので、前述のように大和田よりも圧倒的に不利な位置に置かれている。そのため、この時に「大堰は取水口で取水したあと七つ江で分水していることは先に述べたが、干ばつになると七つ江の各江の流末、ことに大和方面の諸村（中島・舟津・馬場・横谷・吉井本郷）がもっとも早く枯先田地になり苦しむ。これを解決するために「かいか堰」という堰水落としの方法」を始めたというのである（307頁）。

このように、大和田が持っていた藤五郎堰の権限の強さに、諸他の村々が大変な思いをさせられていた。そしてこれは、戦後にダムがつくられるまで続いた。そのダムについては第九章第二節の「農業の近代化」で詳述されている。

1953、54年に水害が続き、上流に用水ダムを建設することとなり、丸つぼダムと命名された。これによって「渇水の心配も緩和され、また複雑な水利慣行もなしくずしの傾向となっていた」（403頁）という。しかし1958年に再び大洪水に見舞われたため、丸つぼダムが「そっくり腹中に入って」しまう新保川ダムがつくられることとなった。ところが測量試験の結果、「洪水時ダムの水位が藤五郎堰を超えることが判明した」。そのため、設計者は、藤五郎堰を存続させての取水の工夫という第一案と、藤五郎堰の実質的廃止という第二案を、新保川水系委員たちに提案した。この時の委員会では、全15名の委員のうち、大和田からは2名に過ぎず、「水系委員の中でも、大和田以外の委員の共通認識は、藤五郎堰の不合理性を如何にしたら打破できるか」「水利慣行権とはいえ、分水の公平を欠く藤五郎堰の仕組みをすべて改革すること」にあった。したがって、「藤五郎堰は正に悪の代名詞のような存在で」あり、大和田出身の委員は「会場の片隅に小さくなっていた」という。つまり、第二案の藤五郎堰の廃止に、委員会全体の関心が集中していたのであった。

この後、大和田地区でも集落の総会が開かれたが、席上では誰も意見を発しなかった。というのは、「丸つぼダムができてから用水も楽になり、昔の苦労はすでに忘却の彼方になっていた。さ

らにまた大型ダムができるというので全面的にダムに依存していく傾向が強かった」からだということであり、大和田の人たちにとっても、一ノ堰である藤五郎堰は既に無用の存在になっていたからであった(407-408頁)。こうして新たなダムが完成し、「慶長以来大和田台地の開発と共に開かれた藤五郎堰の水利慣行はすべて消滅した」(408頁)。

このように見てくると、藤五郎堰をめぐる一連の出来事のこうした記録は、まさに慶長から昭和戦後にいたるまでの三百数十年にいたる、新保川水系にまつわる「水利慣行の地域史」に他ならない。それだけ本書では、大和田地区の水利慣行についてダイナミックでいながら緻密な地域史が描かれているということである。その意味で本書は、大和田地区の「水利慣行の地域史」が、郷土史家たちの力を借りながら地元の人たちによって詳細に記述されたものということができるであろう。

V. 事例から見えること

以上のように、前章では沖縄県二つ、北海道一つ、新潟県一つの事例を具体的に検討してきた。これらについては、次のようにまとめることができると思う。

まず和仁屋では、地区内の歴史的経緯を物語る「わな自慢」や「沖縄戦」、実際の「くらし」の状景が、数多くのコラム欄も交えながら描き出される地域誌としてつくられていた。ただ和仁屋では、本稿では触れなかったが拙稿(2022)で紹介したように、実は編集時にフリーランスの編集者が非常に深く関わっていた。毎月2回ずつ編集委員会を開いて各自の進捗状況を確認し合っていたのだが、その際の司会進行及びとりまとめはすべてこの編集者がおこなっていた。もちろん、実際に資料を探したり聞き取り調査をおこなうのは地元の編集委員たちであったが、それらをチェックし、また方向性を示唆するのも編集者の役割であった。実際には、和仁屋区と県内のある出版社が契約を結び、その出版社から委託されるかたちでこの編集者が関わっていたので、その意味では先に挙げた類型でいうと3の「業者へ依頼する場合」に該当するといえるだろう。

ついで同じ沖縄県の青那志では、先述のように既に集落としては存在していない地区の記録となっていた。また同地区では沖縄戦の影響もあって史料も残されていない状況で、ことさら聞き取り調査や回想から地域を再現する形を取っていた。このことは「別添折込」として附属された「昭和20年(1945)3月当時“越来村字青那志住居見取図”」も同様であろう。沖縄県では聞き取りと回想を通じて戦争で失われたかつての地区を再現する試みがしばしば見られるが、そのことが青那志でもおこなわれていたのである。

他方、北海道当別町の川下では、「編集後記」で「全精力を傾け努力を致しましたが、文筆に疎い素人の集まりはいかんともし難く」と書かれていたように、業者や郷土史家などの手助けなく、地元の人たちで作っていた。同書は「開基百年記念」としてのものであり、北海道内の周年記念誌では多くが自分たちの力で作られていると思われるので、川下でも同様であったと考えられる。また、本書では第三章「産業」と第七章「地域の現況」の分量が圧倒的に多い点が特色であるが、これは平取町の『二風谷』でも見られたことであるので、全体の構成を始め編纂にあたっては北海道内の諸他の地域史誌を参考にしたと考えられよう。

最後に見た佐渡の『大和田誌』は、前章で詳細に見たように郷土史家あるいは歴史の専門家としても著名な人たちの指導のもとで分厚い歴史記述がおこなわれていた。実はこの点に関しては、現在佐渡市になっている旧佐渡郡金井町全域が、こうした地域史誌編纂に非常に熱心だったことを指摘しておかなくてはならない。というのは、『大和田誌』よりも11年早く出された『吉井本

郷』(1990)、3年後に刊行された『佐渡 中興史』(2004)も同様に田中圭一氏や児玉信雄氏の指導のもとでまとめられており、いずれも『大和田誌』と同じく重厚でかつ緻密な地域史となっていた。その意味で、『大和田誌』もある日突然出現したものではなかった。そのため、『大和田誌』を真に評価していくためにはこれら2冊、さらに佐渡のなかでの他の地区での地域史誌の通読と比較が必要となってくるだろうと思われるが、この点は本稿では追い切れないので、今後の課題として捉えておきたい。

このように見てくると、一口に地域史誌といっても内実は多様だということが改めて実感できる。ただ留意しておきたいのは、これは筆者がセレクトした沖縄県、北海道、新潟県の違いでもある点である。かつて筆者は、沖縄県、北海道、長野県の地域史誌を比較して、沖縄県を「[字誌]の世界」、北海道を「[開基]記念」、長野県を「分厚い郷土史の伝統」という枠組みで分けて考察したことがある(拙稿、2017、126-127頁)。この場合、長野県は沖縄県や北海道と違って古文書など多くの史料が存在するうえ、郷土史の伝統も非常に根強いという意味でそのように表現したものであった。しかし古文書などの史料が多く残されているという点では長野県以外の諸府県も同様であり、本稿ではそれを新潟県佐渡に求めたことになる。その意味で、沖縄県、北海道、新潟県で異なっているのはむしろ当然のことであるともいえるだろう。

とはいえ、これらの4冊だけを通読したからといってすぐに画期的な地域史誌論が展開できるかといえば、それはやはり難しい。そこで最後に、この4冊からいえることを、先に拙稿(2022)で筆者が書いた二つの点を訂正するという形を取って指摘しておきたい。

一つは、地域史誌の特徴は「肯定的な記録」である点だと論述したことである。つまり、拙稿(2022)ではその地域の種々の事物を肯定してから書いていくのがこうした地域史誌の特質であるとしたのであるが、まずこの点を若干訂正しておきたい。

拙稿(2022)では、「ウチの地区には自慢できることがどのくらいあるか」という話し合いから出発したという長野県伊那市の『羽広誌』の事例を取り上げて説明した。その際、本稿でも見た沖縄県北中城村和仁屋の「わな自慢」の概念も同じであるとして議論を補足した。だが、本稿で検討した佐渡の『大和田誌』では古文書読解を通じて歴史を記録していくというものであって、そうした自慢や自己肯定とは異なる客観的次元で歴史が書かれていたといえる。もっとも、劈頭で「大和田薬師とそれを取り巻く薬師十二坊の歴史」が書かれているように、地域での思い入れのあるものを最初に書いている。その意味では、やはり自分たちの生活世界を肯定することから出発しているといえる。ただ前掲拙稿では、肯定という言葉で地域自慢をするのが地域史誌であるかのような書き方をしていたので、そうではないことをここで訂正しておきたい。

二つめに、同じく拙稿(2022)で、地域史誌を「一定の筋立てが欠けている」「二次資料を編纂して書くことが多い」と評価した点である。この点も、やはり『大和田誌』を実際に通読してみれば、特に新保川の水利慣行に照らして文禄年間から昭和戦後に到るまでの変遷が実に緻密に筋道立って描かれていた。この意味で、地域史誌を単に「二次資料を編纂して書く」編纂物と考えたことはむしろ行き過ぎであった。同書が、田中圭一・児玉信雄両氏の徹底的な指導のもとで古文書を自分たちで読んで分析した大和田の人たちがつくった骨太な地域史となっていたことは、前章で詳しく見た通りであり、前掲拙稿において地域史誌をさまざまところから「歴史的事実」を取り出してきて組み合わせた編纂物であるかのように表現した点もまた、ここで訂正しておきたい。

以上、本稿では地域史誌を実際に4冊取り上げて通読を試みてきた。冒頭でも述べたように、これまでアカデミックな次元では地域史誌を丸々一冊通読し、その内容を検討するということが十

分におこなわれてこなかった。その意味で、地域社会で暮らしている「歴史の素人」である住民たちがどのような歴史を自ら書いてきたかということを理解するため、一つ一つを通読してそれを具体的に検討していくことには、大きな意義があると考えられる。したがって今後もこのような通読作業を地道に積み重ねていくことによって、全国の地域史誌の具体層が見えてくると筆者は考えている。そして、その先にはこの一連の研究の最終目的である地域社会の歴史意識を明らかにしていくことも可能になるだろう。改めて、本稿がそのための準備稿であると理解していただければ幸甚である。

注

- 1) この場合、本稿では大学などのアカデミックな機関に所属していなくても、何らかの専門的な歴史学会に所属しているなど、研究者として書籍や論文を執筆している人も含めて歴史学の専門家と考えている。
- 2) 拙稿（2015, 2016, 2017, 2022）を参照。また、筆者以外の先行研究についても、これらの拙稿で詳細に論じているので参照されたい。
- 3) 例えば、末本（2013）第6章や市川（2019）など。
- 4) ここで「素人」という表現をしているのは単に「専門家」に対する対義語として用いているだけであり、見下したようなニュアンスは一切含んでいない。「エキスパート」「スペシャリスト」に対する「アマチュア」の訳語と考えていただきたい。
- 5) 筆者が専攻する社会学でも、何らかの地域を論じる地域社会学の分野では特に地域史誌を参照する場合があると思われるが、これまで研究の俎上に載せられたことはない。
- 6) 神戸大学地域連携センターの活動や主張については、奥村（2014, 2015）、奥村・木村・村井編（2018）なども参照されたい。
- 7) 泉田（2018）、大字請戸区（2018）、西村・泉田編（2019-2021）、西村（2021）などを参照のこと。
- 8) 菅氏らの議論については、菅・北條編（2019）を参照。
- 9) この点については、板垣・野本・田中（2018）、天野・後藤編著（2022）も参照のこと。
- 10) これは、筆者の専攻が歴史学ではなく社会学であることも関係している。本文でも書いたように、本稿の研究の最終的な目的は「歴史学に何ができるか」ということではなく、あくまでも地域の住民たちがどのように地域の歴史を書いてきたか、地域社会における歴史意識とは何かを明らかにすることにある。そのための素材として、地域史誌を例に挙げているのである。
- 11) 「いわゆる旧村単位の「区誌」「町誌」編纂も盛んにおこなわれてきていて、特に中野市や須坂市では全県的に見ても数多くの区誌が編纂されていることに気づく。歴史研究が盛んなこの地域の特徴を表しているといえよう。執筆者をみると、前述した地方史雑誌に執筆している方や、博物館・史料館在職経験者などが多くを占めている」（村石, 2016, 98頁）。
- 12) 沖縄県読谷村にある読谷村史編集室には、「字誌の部屋」という部屋が設けられていて、村内で「字誌」をつくらうとする人たちに利用されてきた。また名護市は、名護市史編纂の過程で「字誌」編集を奨励したことで知られ、1991年には『字誌づくり入門』という冊子までつくられていた。
- 13) この他、沖縄本島北部の村々や、伊平屋島・伊是名島などの離島でつくられた「字誌」には、業者の方から編纂を持ちかけたところも複数あったという（2014年7月2日、かつて沖縄県北部で「字誌」編纂を多く手掛けていた業者へのインタビューから。その業者は今日では解散している）。
- 14) 第二節の宝暦年間と第三節の享保の改革では時代順が逆であるが、本書の記述としてはそうになっている。但し、両節とも長い時間を扱っていてやや錯綜しているので、このような配列なのであろう。

* 本稿で検討した各地域史誌は、地区内に向けて主につくられたもので一般書店で流通しているものではないので、引用の際には個人名が特定・類推されないように留意した。

引用文献

- 天野真志・後藤真編著『地域歴史文化継承ガイドブック 付・全国史料ネット総覧』文学通信, 2022
- 新井かおり「アイヌの集落が自らの歴史を語り始めること—貝澤正が編集する『二風谷』の到達」『応用社会学研究』第54号, 2012
- 泉田邦彦「『地域の記憶』を記録する——浪江町請戸地区における大字誌編纂の取り組み——」西村慎太郎編『新しい地域文化研究の可能性を求めて Vol.5』人間文化研究機構広領域連携型基幹研究プロジェクト「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」, 2018
- 板垣貴志・野本瑠美・田中則雄『地域とつながる人文学の挑戦』今井出版, 2018
- 市川秀之「滋賀県下の字誌にみる歴史実践」菅豊・北條勝貴『パブリック・ヒストリー入門 開かれた歴史学への挑戦』勉誠出版, 2019
- 大字請戸区『大字誌 ふるさと請戸』蕃山房, 2018
- 奥村弘『歴史文化を大災害から守る—地域歴史資料学の構築』東京大学出版会, 2014
- 「歴史資料の保全と活用—大規模災害と歴史学」『岩波講座日本歴史 第21巻 史料論』岩波書店, 2015
- 奥村弘・村井良介・木村修二編『地域歴史遺産と現代社会 地域づくりの基礎知識1』神戸大学出版会, 2018
- 佐藤健二「近代日本民俗学史の構築について／覚書」『国立歴史民俗博物館研究報告』第165集, 2011
- 「佐渡中興史」編纂委員会編『佐渡 中興史』新潟県佐渡郡金井町大字中興区, 2004
- 末本誠『沖縄のシマ社会の社会教育的アプローチ——暮らしと学び空間のナラティブ——』福村出版, 2013
- 菅豊・北條勝貴編『パブリック・ヒストリー入門—開かれた歴史学への挑戦』勉誠出版, 2019
- 拙稿「地域で地域の歴史を書く——大字誌論の試み」野上元・小林多寿子編著『歴史と向きあう社会学——資料・表象・経験——』ミネルヴァ書房, 2015
- 「一般の人たちが地域で歴史を書くとき——沖縄県の「字誌」編集者へのインタビュー」『東京国際大学論叢 人間科学・複合領域研究』第1号, 2016
- 「複数の「歴史」——地域史誌の編纂から考える——」『社会学年誌』第58号, 2017
- 「〔新刊案内〕和仁屋字誌編集委員会編『字誌 わなむら』」『地方史研究』第514号, 2021
- 「地域史と住民—肯定的な記録としての地域史誌—」『都市問題』第113巻第4号, 2022
- 戸邊秀明「史学史と歴史叙述—日本近現代史学史を窓として」『第4次現代歴史学の成果と課題 第3巻歴史実践の現在』續文堂出版, 2017
- 永原慶二『20世紀日本の歴史学』吉川弘文館, 2003
- 名護市史編さん室編『字誌づくり入門』名護市教育委員会, 1991
- 西村慎太郎『『大字誌浪江町権現堂』のススメ』いりの舎, 2021
- 西村慎太郎・泉田邦彦編『大字誌 両竹1～3』蕃書房, 2019-2021
- 村石正行「長野県北信地域における地方史活動」『地方史研究』第66巻第4号, 2016
- 吉井本郷史編纂委員会編（田中圭一監修）『吉井本郷史』吉井本郷区, 1990

付 記

本稿は、JSPS 科研費 JP19K02049 の助成を受けたものである。